

2022/4/10

ヨハネの黙示録 講解メッセージ③

『黙示録を読むに当たって－神の国は来た－』

聖書は、人は死を克服することができるかと教えています。死は滅び、イエス・キリストを信じる者は復活していのちの世界に移され、死が支配する国から神が支配する「神の国」に移り住むようになるのです。

「死からいのちに移された国」、それが「神の国」です。では、神の国はいつ実現するのでしょうか。それは、私たちが永遠のいのちを持つ日です。今、見える世界に生きている私たちは、神の神殿を見ることも、永遠のいのちを見ることもできないため、どう考えても神の国はまだ来ていない、これから来るのだろうと考えてしまいます。しかし、聖書は「神の国はすでに来た」とも記されています。

この「神の国はすでに来たのか、これから来るのか」という問題は、ヨハネの黙示録を理解する上で非常に重要な問題です。

聖書は約束の書です。旧約聖書の古い約束はすでに成就したのか、そして新約聖書の新しい約束はいつ成就するのか、神の国の到来について、御言葉を確認していきましょう。

■神の国はすでに来たのかこれから来るのか

聖書が約束している神の国とは、死がない国、永遠のいのちの国です。そこには、神の神殿があります。聖書は次のように教えています。

「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」（I コリント 3:16）

私たちの中に神の神殿があって、神が私たちに支配しておられるとは、神の国は私たちの中にあるということです。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」（ヨハネ 6:54）

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者」とは、「イエス・キリストを信じる者」を象徴的に表しています。つまり、イエス様は「イエス・キリストを信じる私たちは、すでに永遠のいのちを持っている」と言っておられます。

これらを総合すると、あなたはすでに神の国にいて、永遠のいのちを持っているということになります。すなわち、神の国はすでに来たということです。すでに永遠のいのちを持っているから、肉体が滅びると同時に天に引き上げられるというわけです。しかし、それまでの間、地上で生きる私たちには様々な試練があります。ですから、ヨハネの黙示録は、どんな苦しみにあっても、最後は必ず天国に行くから心配しなくてもいいと、励ます意味で書

かれたと受け止めることができます。

しかし、この世界では神の国は目で見えませんが、神の国はまだ来ていないと理解する立場の人たちもいます。そのような立場からは、聖書が教える神の国とは、この世界が本当に終わりを迎えて、イエス様がこの地上に来られることだと解釈するのが一般的です。すると私たちは、いつ終わりの日が来るのだろうかと不安を抱え、特に現在のようなコロナ禍や戦争の情報を聞くと、世界が終わるのではないかと不安が募るわけです。いったい「神の国はこれから来る」という説は、聖書のどの御言葉を根拠としているのか、確認していきましょう。

「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ 1:15)

マルコの福音書は、共観福音書の中で最も古く、他の福音書の基本になっています。その中でイエス様が、宣教を開始するにあたり、神の国は「来た」のではなく「近づいた」と言っておられるので、神の国はこれから来るのだと理解するようになったわけです。(最近翻訳された聖書のほとんどは、この箇所を「神の国は近づいた」と訳しています。)ところが、この解釈は、イエス様が語られた「あなたがたはすでに永遠のいのちを持っており、死から命に移っている」という言葉と矛盾します。では、原文ではどうなっているのか、少し詳しく見てみましょう。

ここで「近づいた」と訳されている言葉は、ギリシャ語の「エンギゾー」で、確かに「近づく」という意味ですが、時制は現在完了形です。つまり、近づくという行為が完了し、その状態が今も続いているという状態を表しているのです。しかし、「近づく」という行為が完了したということは、目的地に「来た」と理解することもできます。近づくことが完了した状態は、近づいている途中なのか、目的地にきた状態なのか、これは、昔からある哲学の問答に似ています。それは、「私があなたに近づく時、まずちょうど中間地点まで行く。次に、そこからさらにその中間地点まで行く。これを繰り返し続けると、中間地点は無限に存在し、永遠に目的地に到達することはできない。」というものです。しかし、現実には私たちは目的地に到達することを知っています。つまり、「近づいているだけでまだ到達していない」という理論は、屁理屈です。

もっとも、詳しいギリシャ語辞典には、エンギゾーには「近づく」のほかに「来る」という意味が載っています。哲学の問題を出すまでもなく、エンギゾーの現在完了形には、「来た」という意味もあるのです。

さらに、エンギゾーが現在完了形で使われている事例を、聖書のほかの箇所から見つけることができます。

「それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。」(マタイ 26:45)

この「時が来ました」は、マルコ 1:15 とまったく同じエンギゾーの現在完了形です。つま

り、同じ言葉が、マルコ 1:15 では、まだ来ていないかのように「近づいた」と訳され、マタイ 26:45 では「来た」と訳されているということです。要するに、マルコ 1:15 は「神の国は来た」と訳するのが正しいと言えます。

この問題に対して、C・H・ドットとブルトマンが、それぞれ自書（「神の国の譬」「歴史と終末論」）の中で、イエス様は「神の国は来た」と言ったのだと検証しています。特にドットは、エンギゾーが何の訳語かということに着目しました。というのは、当時イエス様が実際にしゃべっていたのはアラマイ語で、新約聖書は、イエス様の弟子がそれをギリシャ語に翻訳したものです。調べていくと、エンギゾーはアラマイ語の「カーラブ」という言葉に相当することがわかりました。これは、「来た」という意味の言葉です。彼はこうしたことを挙げ、イエス様は「神の国は来た」と言ったということを示しました。

イエス様が「神の国は来た」と言われたことは非常に重要です。これによって「神の国はこれから来る」という解釈は成り立たなくなるからです。

こうして 20 世紀の神学には「神の国は来た」という一つの流れが出来上がりました。現在は、「神の国はこれから来る」という従来の説と、「神の国はすでに来た」という説の両方の立場が存在します。

■神の国は来た

「神の国は来た」という前提で聖書を読み進めていくと、イエス様が語られたほかの言葉と、すべて整合性が取れるようになります。たとえば、次の御言葉もそうです。

「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」（マタイ 12:28）

ここで「来ている」と訳されている言葉は、先ほどのエンギゾーではなく、「来る」という意味のプタノーというギリシャ言葉が使われていますが、ここの時制で訳すと「来た」となります。「これから来る」という解釈とは、明らかに矛盾します。そうすると、神の国はすでに来ていて、ダニエル書にある私たちがよみがえるという預言、神の国が実現するという預言は、すでに成就したということになります。確かに、見える状況では私たちはまだ死の中にいて、よみがえっている自分の姿は見えません。しかし、神様の目にはもう私たちのよみがえった姿が見えているのです。

神の国の実現とは、終わりの日の到来と言い換えることができます。終わりの日とは、私たちが永遠のいのちを持つ日、つまり、救いを受けた日のことです。私たちはすでに、私たちの中であっては、終わりの日を迎えたのです。

「わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。」
（ヨハネ 6:39）

ここから、終わりの日とは、よみがえるときと定義できます。それはいつなのでしょう。私たちは「よみがえる」というと、肉体が復活するときに想像します。それも間違いではありません。しかし、それ以前に、復活するためには霊の体を着せられることが必要です。死の体では復活できません。よみがえるには霊の体が必要です（Iコリント15章）。

霊の体はいつ着せられるのでしょうか。私たちが死からいのちに移される時、それは神の呼びかけに応答した時だとイエス様は言われました。それが終わりの日です。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ5:24）

原語に忠実な訳では、「信じている者は永遠のいのちを持っていて、さばきに会うことがなく、死からいのちに移った状態にある」となります。つまり、私たちはもう神の国の中に入っていて、よみがえったということです。終わりの日はすでに来たのです。見える状況は変わっていませんが、イエス・キリストを信じる者は、新しいいのちをもらって、新しく生まれ変わったのです。イエス様は、このことを私たちに伝えようとしているのですが、肉の目では確認することができません。だからいつまでも神の国はいつ来るのか、どこに来るのかと心配し続けるのです。しかし、イエス様は目で見える形で神の国は来るわけではない、あなたのただ中にすでにあると言っておられます。

イエス・キリストを信じる私たちは、もうよみがえって復活しています。すでに新しい命をいただいているので、肉体の死と同時によみがえるのです。これが、神が私たちに届けてくださった私たちの疑問に対する答えです。このことを教えられたパウロは、次のように語っています。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」（IIコリント5:17）

そして、この御言葉は、次のように続いていくのです。

「神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。」（IIコリント6:2）

今が救いの時であり今が恵みの時ということは、誰であろうと神の呼びかけに応答するなら、今約束を手にするということです。これは、信仰でしか確認できません。だから、信仰とはまだ見ぬ事実を確認することだと聖書は教えているのです。私たちはもう新しく造られた者であり、よみがえった者であるから、あとは迎えに来てくれるイエス様を待っていればいいのです。そして、肉体が終わりの日を迎えるとき、イエス様が私たちに天に引き上げてくれるのです。これが2度目の終わりの日です。その時には何の心配もなくなります。こ

れが、死んだらどうなるのかという疑問に対する聖書の答えです。

イエス・キリストは、約束の神の国は私と共に来たという良き知らせを伝えてくださいました。私たちは救われて新しくされましたが、確かに肉体の死の時まで、この地上で様々な試練や苦しみに会います。それに対して、「失望してはいけない、その先にはイエス様が来て私たちを引き上げてくれるから」という励まし、希望を書いたのがヨハネの黙示録なのです。

私たちは見える状態がどうであっても新しく造られたものです。外なる人は衰えますが、内なる人は日々新たにされています。つまり、この地上の体は衰えても、神に造られた霊のからだは日々新しくされ、神の国に凱旋するのを待っている状態なのだと、神は私たちを励ましてくださっています。